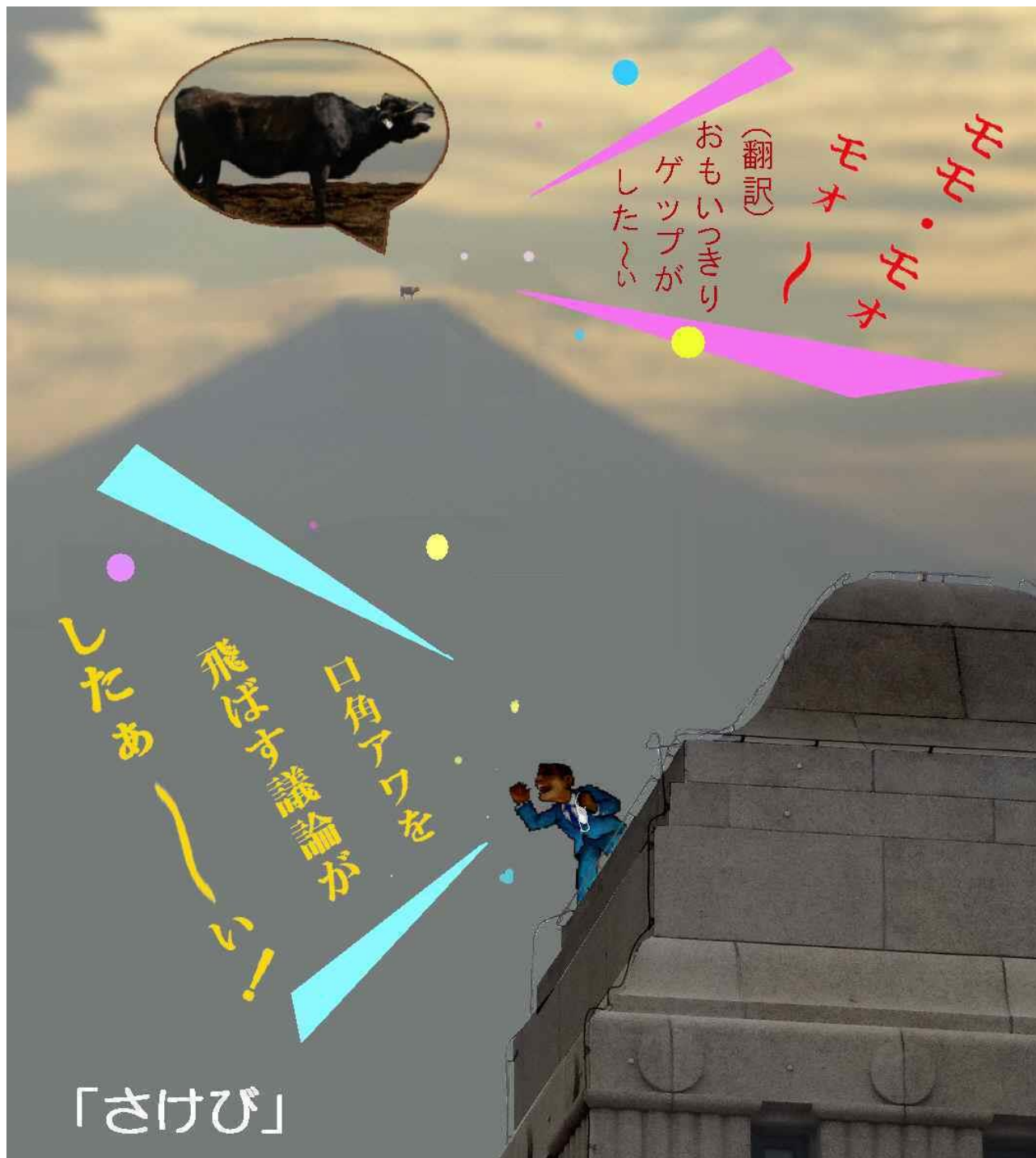


月刊  
JMITU

# さげび

新型コロナ対応版



(翻訳)  
おもいつきり  
ゲツブが  
したしい

モオ・モオ  
モオ

口角アワを  
飛ばす議論が  
したあ  
—いい!

「さげび」

1月号

日本金属製造情報通信労働組合大田地域支部  
セガ グループ分会 2021年発行

No.433

## 2021年働き方はどうなる？

### 更なる成果主義、年功序列廃止

### ジョブ型雇用と解雇の金銭解決

1月15日にセガサミーHDより、昨年の希望退職募集の実施結果が発表されました。

募集人数650名に対し募集を上回る729名という事です。予定より人数が多かったのは会社の退職勧奨が大成功だったのか、この会社に見切りをつける方が多かったのか？

このコロナ渦の中、苦渋の選択をした約8%の方が2月一杯で、この会社を去っていきま

す。その一方で昨年の12月25日には『長嶋茂雄 INVI TATIONAL セガサミーカップゴルフトーナメント』2021年大会開催のお知らせがありました。

賞金総額は1億2千万円だそうです。セガサミーグループ

は、「感動体験を創造し続ける」というグループミッションを果たす重要な手段として、スポーツ支援活動に取り組んでいます。

とても断腸の思いで希望退職を行った会社とは思えない、この賞金額があれば何人の人が辞めずに済んだかと思うと納得がいかないです。

11月6日希望退職募集と同時に、セガサミーホールディングス構造改革委員会より「グループHR変革ビジョン」が発表されました。

内容を見る限り、今までの年功序列をなくし、志と実力に応

じて役割を任せる。同時にその成果や貢献によって報酬が変わる、成果が出せなければ、躊躇なく罷免し、次の候補に機会を

与える。一般社員にも年齢や積み上げの要素を極力排除し、成果が出なければ降格・降給し、状況に応じ別のキャリア構築も考えてもらう。今まで以上に成果主義賃金の色が強くなります。その上、グループ内会社の異動もありえると言うことです。

今までの経験は関係ない、やる気と成果を出せば報酬は上がる。失敗すれば報酬は下がる。常に成果を上げなくては報酬が下がってしまいます。

今までの人事制度も問題がありました。今後更にひどい制度に会社は変えていこうとしています。

人が人を評価することには

限界があります。公平に行う事はかなり難しいです。今までの人事制度の評価を見ていけば分かります。

暮らしを破壊する成果主義の一方的な制度変更には反対します。

私たちJMITU労働組合内ある会社では、「パフォーマンスマネジメントの一環」と称して「あなたの仕事は無くなる」「あなたの働きぶりに問題がある」などの理由をつけ、

「今後のキャリアをどうするか」という面談を繰り返して、社外のキャリアへと誘導する事実上の退職勧奨を行っている問題もおきています。

### ジョブ型雇用

コロナ過による緊急事態宣言でテレワークを推進する企業が増えています。

ところが、テレワークでは従業員の働きぶりが目に見えなくなるため、査定評価方法の一環として多くの企業で「ジョブ型」評価制度の導入が進んでいます。

「ジョブ型雇用」とは、職務内容や責任の範囲、労働時間、勤務地などを限定した雇用形態です。経団連は「メンバーシップ型雇用」を、新卒一括採用・長期・終身雇用を前提とした社内人材育成・年功型賃金を主な特徴とする雇用システムとし、「ジョブ型雇用」を仕事の内容や役割、責任などに分けし、それに合わせた処遇を定め、社内外から人材を集める雇用システムと言っています。

ジョブ型正社員は、職務や勤務地、労働時間を限定する一方、賃金を低く抑え、解雇を容易にする不安定な雇用です。「柔軟な働き方」の名のもとで労働者

の権利を侵害する。こうした働かせ方は絶対に許せません。

ジョブ方雇用は職務を決めて評価するため、結果として仕事に個人個人で固定化されるようになります。

会社の都合で組織構造を変え、仕事を改廃する際、本来は経営責任である「仕事を命じる」「配置転換をする」「再教育をする」事を、従業員個人の自己責任にすり替え、あたかも自己責任であるかのように「あなたの仕事はなくなる。今後のキャリアをどうするか」などと面談を繰り返し、社外のキャリアを選択するように誘導し、人員削減の道具として利用している会社もあります。

現在、厚生労働省で解雇の金銭解決制度導入を検討している

## 解雇の金銭解決制度

ます。

解雇の金銭解決制度とは、使用者が労働者にお金を支払えば違法な解雇があっても有効になる制度です。日本では解雇を使用者が自由に行うことはできないとして、判例が確立されてきました。

また、その判例が労働契約法にも盛り込まれました。

労働者が解雇になった場合は裁判で争うことができても、そのような制度は必要ありません。

解雇を金銭で解決する制度ができてしまえば使用者は解雇するための道具にすることは明らかです。

こうした雇用破壊を行う制度導入は絶対に阻止しなければなりません。

## コロナ渦収まりず

## 暮らしも雇用も不安

消費税増税による景気悪化が続く中コロナ渦が追い打ちをかけ行き詰まりは明白です。

その事態を放置する菅政権に対して、国民の家計を支援し内需を拡大するために、ドイツ、イギリス、韓国など約20カ国が日本でいう消費税にあたる部分を引き下げています。

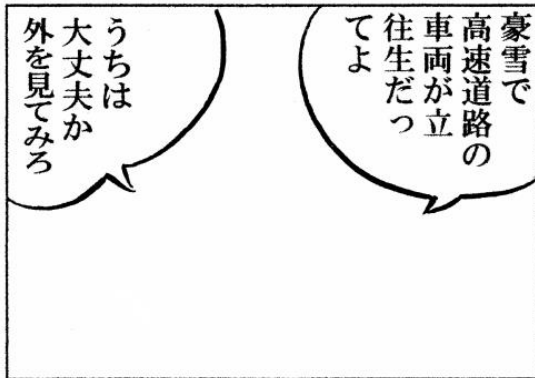
日本も消費税を下げていくべきです。

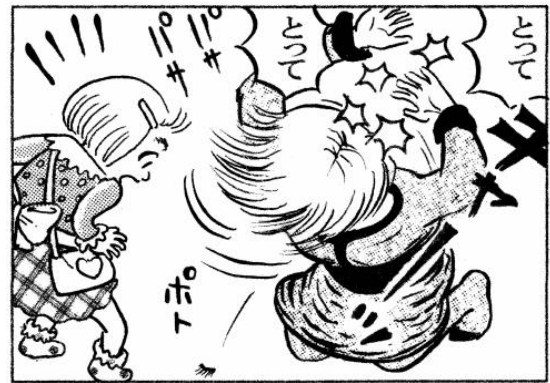
いま、暮らしと雇用を守る施策の強化が求められます。

解雇や雇い止めを回避し労働者が生活できる収入を政府が保障することが必要です。

# 4こま漫画

川崎よしき





仙洞田一彦

眼鏡は黒の太縁で、インテリっぽくかつ几帳面そうに見える。

私がコンビニ店に入ると、やはり几帳面そうな――西は、カウンターの中にいる時はカウンター内から出て、私の後をつける。棚の間で品物を補充しているときも、その手を休めて私が見える位置に移動してくる。あからさまではないが、それとなくである。私の思い過ごしではない。私がその店内にいるときには――西は、いつも私が見える位置にいる。見張られようと、どうしようと万引きするわけではないのでかまわない。棚から取り出したものの代金はすべて支払っているのだから。

おそらく彼は、私のことを気にしているだろう。どういう気にし方かというのと、彼つまりコンビニの店員が、私を万引きではないかと疑っているのではないかということだ。店員が着けている名札を見るとなんとか西というらしい。一字目が難しく読めない。二字目が西という字だ。そのなんとか西という男は三十代から四十代くらいか。頭髪はきつちり七三に分けていて、中肉中背。がっしりした体型をしている。コンビニの制服も似合っている。掛けている

去年の秋いやな事件が起きた。路上生活者の女性が、バス停のベンチに座っていたところを撲殺されたのだ。午前四時頃のことという。バスは走っていないだろうし、当然バス停は空いている。女性がベンチから立ち退かなかったのに腹を立てたらしい。おそらく犯人は、そこにいてはならない女性という線引きをし、排除しようとしたが従わなかったので殺したのだろうと、私は推測している。犯人は几帳面な性格だったのではないか。線を越えることが我慢できなかつたのだろう。

わたしも――西が、程度の差こそあれ特別だとは思っていない。他のコンビニに行っても、そう思わせる店員の動きを感じる時があるからだ。私

が他の人からそう思わせないような身なり、風体をすればいいのだろうが、長いことその身なりで過ごして来たし、特に変える必要を感じてもない。不精髭に粗末な服。一つの季節を一着で過ごす生活。もう二十年、あるいは三十年も前のこと。会社からの帰宅途中で定食屋に入った。今まで入ったことのないというか、出来て間もない定食屋だった。カウンターだけで十席くらいの店だった。先客が二人ばかりいた。私は空いている席一つに腰を下ろした。新しいメニューが壁に貼ってある。そこに「酒一合」と書いて

てある。私はメニューの方を見ながら言った。

「お酒、熱燗にして」

カウンターの中の白衣の男、店主だろうと思うが、その男が言った。

「あんたに出す酒はないよ」

とっさに意味が分からず、店主の顔をみた。

「あんたに出す酒はない」

また店主が言った。そして店主は客の一人に顔を向けてニヤリと笑った。その客は笑顔を返すわけでなく、無表情のまま私の姿をみて、また店主に顔を向け、そのあと無関心な風に食事を続けた。

私は「あんたに売るモノはない」と言われたのと同じなので、その定食屋を出た。定

食屋の店主に見覚えはなかった。恨みを買うようなことをしたこともない。おそらくわたしの風体ふうていを見て、真新しい店が汚されると思って言ったのだろう。それで少し回り道にはなるが、いつも行っている定食屋に行った。

追い出された定食屋が、それからそれほど経ってはいなかったが、いつの間にか潰れていた。扉に書かれた店名に、ビニールテープがバツ印に貼られていたのを見て、ちよつといい気分がした。身なり、風体で客を選別するからだ。私はコンビニ店のレジカウンターに、うどんとつまみになりそうな芋煮と漬物を置いた。

「温めますか」

カウンターのの中に入ったばかり―西が私の前に立ち、聞いた。私は首を横に振った。

「袋をつけて」

コンビニのポリ袋が有料になったので言った。―西は、

カウンターの下から新しい袋を取り出して、その袋に私が買ったものを入れた。レシートも受け取り、ポリ袋の中に放り込んだ。

私は―西の手の動きを見ながら言った。

「その公園にホームレスが住み着いたようだね。夜だけ現れるようだけど」

「そうですか。見掛けたことないですけど」

―西は私の顔を見ずに答え

た。公園はコンビニの隣にある、というか、先に公園があつて、公園の隣りにコンビニができたのだ。公園は住宅に隣接している側は金網が張り巡らされている。私はさらに言った。

「見ない。いるようだよ。まさか、PCR検査なんかしてないだろうね」

―西は顔を上げると私に聞いた。

「コロナにかかっている噂、あるんですか」

「いや噂があるわけじゃないけどね。もし、もしもだよ、コロナにかかっていたら怖いでしょう」

「そうですね」

―西は答えた。そして私の

着ているカーデイガンの袖口

笑い顔のままに言った。

私の顔を見ると、反射的に行

「荷物は下に置いてくれ。邪

に―西の視線が動いた。ほつ

「今度、逮捕されるようにな

動を起こすようだ。コンビニ

魔になる」  
客に言う言葉遣いではない。

れた毛糸がぶら下がっている。

それからカーデイガンのボタ

に行く時に、わざわざ着替え

確かにこれから客が来るかも

ンに視線が移動した。ボタン

「俺みたいなのは危ないかね」

ボタンが取れそうなカーデイ

だ。次に来た客が、わざわざ

を取れかかっている。マスク

「いや、疑わしきは罰せずで

いしてくれても良さそうなの

私のすぐ隣りに座るはずはな

をしているから無精ひげは隠

すよ」

―西の内面にはあるのだろう。

抱えて店を出た。カウンター

から、何を捉えているのか分

そう答えた―西の顔に影が

何年か前のこと。ラーメン

の席と壁の間はいくらも幅が

からないが私には確信がある。

―西は本心とは別のことを言

いたせいか、客はいなかった。

空いていない。袋を三和土に

私は―西の視線を意識して言

っていると思った。疑わしき

その日は黒い布の大きな袋を

持っていた。長年使っている

「もつと怪しくて、あぶない

も罰するだ。」

コンビニ近くのアパートに

袋とはいえ、土間には置きた

のは俺の方かな」

そう言って笑いながら、私

住む私は、一週間に二回くら

くはないものが中に入っていた。

は両手を開いて挙げ、首を下

いは店に行く。無論一日に二

回はカウンター席の一つに腰を

座席に置いたところで、シー

に向けて左右に振り、自分で

回、三回という日もある。顔

下ろし、荷物でふくらんだ袋

を隣の席の上に置いた。する

自分の風体を見る仕草をした。

馴染みの客扱いを―西はしな

い。一度だって万引きなどし

たことがない。なのに―西は、

―西は口端を吊り上げるよ

うに苦笑いを浮かべた。その

店主だと思うが。言った。

私の風体かも知れない。袋の



置き場所に文句を言ったが、本音は店から出て行ってくれということかも知れない。感じ取った私は店を出た。

コンビニ店の――西は、私の言葉に行動を起こすだろうと思った。隣の公園だから関係ないといってやり過ぎすことはないだろう。夜、様子を見にくるに違いない。俺の風体を見てもそれとなく監視する。隣の公園にそれらしいのがいることだって我慢できない性格に違いない。几帳面な男だ。間違いない。

私は外から見たら丸く見えるほど着込んだ。夜の十一時頃、公園の隅にあるベンチに坐りこんだ。頭を殴られたらたまらないのでヘルメットを

かぶり、上からさらに毛布で覆い、目の部分だけは開けた。何を馬鹿なことをというが、

私の抱いた――西の性格をこの目で、確認したかった。――西に劣らず、私も負けず劣らず頑固、几帳面な性格かもしれない。ベンチに座ってからのくらしい時間が経っただろうか。寒い。冷える。こんなバカなことをして、ほんとに馬鹿らしいと思い、アパートに帰ろうと思った時だった。

――西の体型そっくりの影が、公園に入ってくるのが見えた。思わず緊張した。――西らしき人物は、片手に白いポリ袋を下げている。バス停で女性が石の入ったポリ袋で殴られ、死亡した事件を思い出した。

私はますます、私自身の人を見る目の確かさを自認した。

身体を固くし、上目遣いに気配をうかがう私の前に、――西が来た。――西は手を伸ばし、持っていたポリ袋をベンチの空いたところに載せた。

「あと一時間で消費期限が切れるけど、チンして来たばかりで温かい弁当だから、よかったら食べて。温かいお茶も入っているから」

たしかに――西の声だった。言い終わると、――西はすぐに公園の出口に向かって行った。